



TITLE:

後魏柔然表(下): 中古蒙古史の編年  
史的整理の意圖をかねて

AUTHOR(S):

内田, 吟風

---

CITATION:

内田, 吟風. 後魏柔然表(下): 中古蒙古史の編年史的整理の意圖をかねて  
. 東洋史研究 1945, 9(3): 152-175

ISSUE DATE:

1945-11-05

URL:

<https://doi.org/10.14989/145827>

RIGHT:

# 後魏柔然表（下）

——中古蒙古史の編年史的整理の意圖をかねて——

内田吟風

延興三年（予成、永康十年・四七三）

二月・四月・契丹國魏に遣使朝貢す。

七月・柔然の兵、敦煌を侵す。鎮將樂洛生これを撃破す。<sup>①</sup>

八月・九月・庫莫奚、魏に遣使朝貢す。

十二月・柔然、邊を犯し、柔玄鎮の二部勅勒亦叛して之に應ず。

① 延興二年の敦煌侵寇に引き續き、柔然が北魏の西面を脅威し始めたものに外ならぬ。帝紀には此事件を記して「事具蠕蠕傳」と附記してあるが、現行本北史魏書蠕蠕傳は此事件に關して記載する所無し。

延興四年（予成、永康十一年・四七四）

五月・柔然、魏及び宋に遣使朝貢（魏書宋書紀）

七月・柔然、敦煌鎮を攻む。鎮將尉多侯、大いに之を破る<sup>②</sup>。尙書奏して敦煌鎮を涼州に退移せ

んことを請ひしも、給事中韓秀これを非とし、

事罷む（韓秀傳）<sup>③</sup>。

九月・契丹、庫莫奚、地豆干諸國各、遣使、魏に朝貢す。

是歲・柔然遣使、宋に方物を獻ず（宋書紀）。

① 延興二年の條に掲げし尉多侯と柔然部師度拔との戰鬪は或は是歲の事かも知れざること前記の通である。

② 韓秀の議は、漢の武帝が河西四郡を開きて匈奴、西羌兩者の交通を遮斷し、以つて匈奴に大打撃を與へたのと同様、敦煌鎮は柔然、吐谷渾の交通を遮斷するものにして、退却すべからずといふに在つた、事詳しく韓秀傳に見ゆる所である。但、該傳は此鎮移轉の事件を唯延興中となすのみである。今通鑑によりて七月に繋ぐ。

延興五年（予成、永康十二年・四七五）

五月・契丹、庫莫奚、各、遣使、魏に名馬を獻ず。

六月・京師の死罪人を曲赦し、柔然防禦に遣備す。  
八月・地豆干、魏に遣使朝獻。

十月・可汗予成、魏に遣使朝獻し、婚姻を通せんことを請ふ。有司、予成が屢、邊塞を犯せるを以て、其使を絶ち、發兵之を討たんことを請ふ。獻文帝①、其款意にそむく可からずと謂ひ、詔報して婚姻の重すべく輕、しく行ひ難きを諭す②。予成、譌詐を懷き、詔書を見て中止し③、獻文帝の在世中は再び婚を求めず。

是歲、宋僧釋法獻、金陵を發して巴蜀、吐谷渾より柔然中を経て、干闥に到りしも、葱嶺を越えんとして棧道の斷絶に遭ひて還る（高僧傳初集）。延興年中・勿吉國、使者乙力支を遣して魏に朝獻す（勿吉傳）。

- ① 獻文は太上皇帝として崩年承明元年迄政をとれり。  
② 帝言並に詔は、蠕蠕傳に收載せらる。  
③ 通志卷二百。

承明元年（予成、永康十三年・四七六）

二月・五月・八月・十一月・柔然遣使魏に朝貢す。

二月・七月・庫莫奚、九月・庫莫奚、契丹各、遣使朝貢。

太和元年（予成、永康十四年・四七七）

二月・三月・十月、契丹、庫莫奚並に魏に入貢。  
四月・柔然、使者莫何①、去汾比拔等を魏に遣し、良貂裘を獻す。五月・九月・また朝獻。

① 何、魏書傳河に作る。（北史通志は何。）比拔等、此時、魏朝の珍寶の華麗豐富なるを一觀せんことを請ひしを以て、有司に勅して御府の珍玩器物等を出して展觀せしめしに、比拔等自ら相謂つて、「大國の富麗、一生未だ見ざる所也」といふ。

太和二年（予成、永康十五年・四七八）

二月・比拔等を又遣して朝貢、尋いでまた婚を請ふ。孝文帝、志、招納にあり、之を許す。予成、歲貢絶えずと雖款約著しからず、婚事また停む。

八月・勿吉國、魏に遣使朝獻①。

九月・柔然國、遣使宋に方物を獻す。宋の宰相蕭道成、驍騎將軍王洪範②を柔然に遣し、期を約して共に魏を伐たんことを議す（宋書帝紀、南史北狄傳、南齊書內傳、建康實錄、通鑑考異六）

この頃（太和初）、さきに柔然の立てし高昌王閼伯周死し、子義成立ちしが、歲餘にして其兄首歸、義成を殺し、自立して高昌王となる（高昌傳）。

① 勿吉傳に太和初又貢馬五百匹とあるは、是時の事な

るべし。

② 通鑑考異「齊書作王洪軌、今從齊紀」

太和三年（予成、永康十六年・四七九）

四月・柔然、魏に朝貢。

九月・地豆干、契丹、庫莫奚も亦各、朝貢。

十一月・可汗、南齊の使王洪範の勸説に従ひ、十餘萬騎を率ゐて南下、魏の塞上に至る<sup>①</sup>。魏兵、關を閉して拒守、戰はず。可汗、燕然山下に獵して歸る（宋書梁齊芮芮傳）。

是歲、柔然、高勾麗と計りて共に地豆干を分取せんとす。契丹其侵冒を恐れ、其莫何弗勿干は部落、車三千乘衆萬餘口を率ゐ、雜畜を驅徙して魏に内附す。魏、之を白狼水東に置く（契丹傳）。

① 昨年、宋都を破した王洪範は、巴蜀より吐谷渾に出で西域を経て此年漸く柔然可汗庭に達し、可汗に説いて討魏の軍を起さしめたのである。宋書には、「八月芮芮主發三十萬騎」とある。可汗は八月三十萬の兵を發し、十一月其中十萬騎を親率して塞上に進んだものと考へられる。

太和四年（予成、永康十七年・四八〇）

三月・柔然、魏に遣使朝貢す。

是歲・可汗頻に使を齊に遣し、貉皮雜物を貢し、

また書を齊の太祖に致し、共に魏を伐たんことを言ふ。其書、齊帝を足下といひ、可汗は自らを吾と稱す。其使、常に河南道より、益州にいたる（南齊書傳）。

是歲、庫莫奚、北魏の塞内に入る。地豆干の抄掠を畏避するを以て辭とす。魏帝、詔書之を切責す。（庫莫奚傳）

太和五年（予成、永康十八年・四八一）

七月・柔然の利師他稽、衆を率ゐて魏に内附す。

九月・柔然、齊に使を遣し師子皮の袴褶を獻じ、共にまた魏を伐たんことをいふ。（その皮、虎皮の如く、白色短毛、賈胡曰く師子皮に非ず扶拔皮なりと。）（南齊書芮芮傳）

十月・柔然、魏に遣使朝獻す。

是歲、高車の王阿伏至羅<sup>①</sup>、高昌國王爾彌兄弟を殺し、敦煌の人張孟明を以て王とす。後、國人、孟明を殺し、馬儒を立て、王となす（高昌傳、通鑑卷一百九十一、通鑑齊紀一）

① 高昌傳には可至羅とある。之は從來、柔然に屬隸してゐたがこの後數年にして柔然より獨立し、高車族臨昌の基を建てた高車族中の副伏部の酋長阿伏至羅の事であると考へられる。通典には、正しく「太和五年高



車王阿伏至羅殺闕王」と記されてゐる。北魏末に現はれた高車何至羅國は此の阿伏至羅の子孫の國である。

可(何)至羅は阿伏至羅の訛に過ぎぬ。兎に角、この阿伏至羅の高昌王廢立の事實は、この太和五年頃既に高車の勢力が増大して天山々北よりツルファン地方に及ぶに至つてゐたことを示すものに外ならぬ。

太和六年(予成、永康十九年・四八二)

二月・地豆干、魏に朝貢。

六月・柔然も亦朝貢。

太和七年(予成、永康二十年・四八三)

八月・齊の使者王洪範、可汗庭より齊都に還る。

經塗三萬餘里と稱さる。(南齊書芮芮傳)

太和八年(予成、永康二十一年・四八四)

二月・柔然、遣使朝貢。

太和九年(予成、永康二十二年・伏古敦可汗豆嵩、太  
平元年・四八五)

六月・齊、給事中吳興の丘冠先を遣して吐谷渾に  
使せしめ、併せて柔然の使を可汗庭に送らしむ。  
可汗丘冠先に禮敬を強ふ。冠先、拜を肯ぜず。遂  
に可汗の爲に殺さる。(南史丘冠先傳、通鑑齊紀)⑥

十二月・柔然、魏塞を犯す。任城王澄、衆を率ゐ

て之を拒ぎ退く。

是歲・可汗予成、卒す。子豆嵩嗣立し伏古敦可汗⑦と號し、改元して太平となす。豆嵩、性殘暴好殺。其名臣侯醫西石洛候⑧屢、忠言を以て之を諫め、且つ魏と通和し、中國を侵ざらんことを鞠む。豆嵩怒り、石洛候反を謀ると誣ひ、之を殺し其三族を夷す。國內騷亂、部落離散す。

是歲・勿吉國、すた使者侯尼支を遣して魏に朝獻す(勿吉傳)。

① 南齊書河南傳には、丘冠先永明三年吐谷渾蠕蠕に使し、同六年無事歸國、同八年再び吐谷渾に使し、これに於てはじめて河南王の爲に殺害せられたりと記し、南史丘冠先傳と大いに異同あり。姑く疑を存す。

② 魏書、恒也(傳)。白鳥博士(上掲書)は伏古を蒙古語の *monke*, *mnkh* (長生の義) の古代音 *mnkh bngi* を寫せるもの、敦は同じく蒙古語の *tu, du* (的、有の義) の音を寫せるものとし、伏古敦は即ち長生の、有長生の意なりと説けり。藤田博士(上掲書)は、之を *bois* (神性の人の義) の對音か若くは *bei bekhu* (貞固、強健、永續の義) 對音ならんかと説けり。

③ 通志、璽を璽に作る。

太和十年（豆崙、太平二年・四八六）

正月・柔然塞を犯す。

三月・可汗豆崙、使者牟提等を魏に遣し朝貢す。牟提、小心恭慎、甚だ使人の禮有り、孝文帝の嘉賞する所となる（高閭傳）。

勅勒族①、柔然に叛す。豆崙自ら將として之を討ち、追ふて西漠に至る。魏帝、投化の者よりこの事を聞知し、虚に乗じて柔然を討つべきや否やを議せしむ。左僕射穆亮等は撃たんことを請ひ、中書監高閭は之を否とす。帝、閭の議②に従ひ、厚禮して使者を歸す（高閭傳、通鑑齊紀）。

十二月・柔然、塞を犯す。

勿吉國、魏に遣使朝獻。時に勿吉の隣近なる大莫盧、覆鍾、莫多回、庫婁、素和、具弗伏、匹黎余、拔大河、郁羽陵、庫伏眞、魯婁、羽眞侯の諸國も亦前後各、遣使朝獻す（勿吉傳）。

① 敕勒即ち高車が君長阿伏至羅に率られ、柔然より畔叛せるは、翌太和十一年の事に屬す。此の勅勒の背叛を松田壽男學士「高車獨立年代考」（同教團一の一）は阿伏至羅のこととするも、阿伏至羅とは別の部落の事件とも考へられ、斷定し難い。

② 閭の議は彼が傳に詳記せられあるが、要するに、秦

漢の世は海内一統、故に遠く匈奴を征せり。今は南、吳寇あり。何ぞ之を捨て、深く虜庭に入る可けんや、と、云ふに在り。帝即ち、兵は凶器也、聖人止むを得ずして之を用ゆ。先帝屢、出で、征伐せしは未賓の盛ありしが故也。今朕、太平の業を承く。如何ぞ故無く兵革を動すべけんや、とて討伐しなかつたのである。

太和十一年（豆崙、太平三年・四八七）

八月・柔然、塞を犯す。平原王陸叡、陸五千を率ゐて之を討ち、追ふて石碣に至り、其帥赤阿突等數百人を擒へて歸る（陸叡傳、天象志三）。

是歲・豆崙頻に塞を犯す。柔玄鎮將李兜これを討撃す（奚康生傳）。

また柔然隸下の高車副伏羅部の長、阿伏至羅、其の從弟窮奇、豆崙の魏邊侵犯を固諫して容れられず。阿伏至羅等怒つて、所部の衆十餘萬落を率ゐて西叛す。

（すなはち阿伏至羅は車師前部（ツルファン地方）の西北に至つて自立し、王となる①。國人、阿伏至羅を號して候婁飼勒といひ、窮奇を候倍と號す。前者は天子、後者は儲王の義なり。二人和穆、部を分ち、阿伏至羅は北に在り、窮奇は南に居る。）

豆崙、之を討ちて頻りに敗戦、遂に衆を率ゐて東徙す（高車傳）。

① 蠕蠕傳は主に作り高車傳は王に作る。尙、前者がこの高車獨立を太和十六年陽平王頤等の北討の時の事となせるの誤であることは、後者（高車傳）の記載より推して明かである。

太和十二年（豆崙、太平四年・四八八）

十二月・柔然の伊吾戍主高羔子、衆三千を率ゐて城を以て魏に内附す。

是歲、勿吉國、魏に精矢方物を貢す。

是頃、南齊の益州刺史劉俊、使者江景玄を丁零①に遣し、齊國の威得を宣せしむ。道、鄆善を經るに、鄆善既に丁零の破る所にして、丁零、天子を僭稱す。丁零主、景玄を勞接し、反命せしむ。（南齊書傳）

① この丁零が、高車阿伏至羅のことを指せるは疑なかるべし。

太和十三年（豆崙、太平五年・四八九）

是歲、柔然の別帥叱呂勤、衆を率ゐて魏に内附す。

太和十四年（豆崙、太平六年・四九〇）

四月・地豆干頻に犯塞、征西大將軍陽平王熙、之を擊走す。

五月・庫莫奚亦犯塞、安州都將樓龍兒、之を擊走す。是

等東北諸族の侵犯は、前年豆崙の東徙の結果、其使賊を受くるに至つた爲ならんと考へられる。

是歲、高車王阿伏至羅、南胡①を魏都に遣し、二箭を奉貢し、天子の爲に柔然を討たんと言ふ。

帝未だ信ぜず、使者干提を遣し往きて虚實を覘さしむ。阿伏至羅、窮奇と共に、使者舞頡を遣し、干提に「隨ひて來朝せしめ、其方物を貢す。帝、員外散騎常侍可足羅長生に詔し、また干提」と共に高車に使せしめ、阿伏至羅、窮奇に各、繡袴褶一具、雜彩百疋を賜ふ。時に阿伏至羅驕傲、提長生に拜を強ひ、提等之を拒むや囚執す。（提等後三年にして還るを得たり）。（高車傳、朱長生傳）

① 傳には遼南胡越者と見ゆ。高車酋長樹者の例より推し越者は人名ならんか。

太和十六年（豆崙、太平八年・候其伏代庫者可汗那蓋太安元年・四九二）

八月・陽平王頤、左僕射陸叡並びに都督となり、斛律桓、揚播等十二將七萬騎を以て、豆崙を征す。中道は黑山を出で、東道は土蘆河を趨り、西道は侯延河に向ふ。大磧を過ぎ大いに漠北に柔然を破り、大獲して還る。然れども時大いに寒害、人馬の死するもの衆多。（陽平王頤、陸叡、揚播傳、天象志四、南齊書附傳①）。

是歳、可汗豆崙、叔父那蓋と共に高車を撃ち、豆崙は浚稽山北、那蓋は金山より出で、二道より西進す。豆崙頻に阿伏至羅の破る所となり、那蓋は累に戦捷す。國人みな那蓋を以て天の助くる所となし、之を推して主となさんと欲す。那蓋従はず。衆乃ち豆崙母子を殺し、屍を以て那蓋に示す。那蓋乃ち襲位、候其伏代庫者可汗<sup>③</sup>と號し、改元して太安となす。

① 南齊書の記載、平原王陸淑を平元王楊庭澤（平原王步六孤—陸氏の舊姓步六孤）、龍驤將軍楊播を龍驤將軍楊延（播の字は延慶）と誤るも、この記載が此の十六年の柔然征討のことに係ること疑なし。

② 魏言、悅樂也（傳）。藤田博士（上掲書）は、候其伏代を以て蒙古語 *Kesak, bidak-i*（幸福にあづかる、共に幸福を享くる義）に當て、者を以て *eg-i*（何、行爲をなす者といふ義を示す語尾）に當てたり。

太和十七年（那蓋、太安二年・四九三）

正月・勿吉の使人婆非等五百餘人朝貢。

五月・契丹、庫莫奚、遣使朝貢<sup>①</sup>。

齊永明中、柔然齊武帝に、醫師、錦織工匠、指南車、漏刻等のものを求め、帝より婉曲謝絶せらる（南齊書芮芮傳）

① これら東北諸國の魏への朝貢再開は、可汗那蓋の西

征により、柔然の東北諸族に對する壓迫緩和せられ、是等諸族の中國との交通復活せしものと解さる。

太和二十一年（那蓋、太安六年・四九七）

十二月・高昌國魏に遣使朝貢す。

太和二十二年（那蓋、太安七年・四九八）

八月・孝文帝、高車の兵を召して征齊の軍に従はしめんとす。高車南行を願はず、遂に袁紇部<sup>①</sup>の樹者を推して主とし、相率ゐて北叛す。金陵都督宇文福追討し、大敗して還る。帝、平北將軍江陽王繼に詔し、北討諸軍事を督せしめ、懷朔鎮以東悉く繼の節度を受けしむ。繼、上表し優慰を以て事に當らんと請ひ<sup>②</sup>、まづ人を遣して樹者を慰諭す。帝、高車を親征せんとし、任城王澄之を諫止す。會、樹者は柔然中に入り居たるも繼の慰撫に接し、悔恨率衆、魏に降る。

十二月・高車の變鎮定す（高車、道武七王、景穆十二王、宇文福傳）

是歳、庫莫奚安州に入寇。營燕幽三州の兵之を撃走す。（以後、また款附交易を乞ふ。詔して限節交市をはるす）（庫莫奚傳）。

① 魏書北史兩傳共、諶を表となすも、之さきに魏に降附せる烏頻袁乾諸部中の袁乾なると疑なし。通典通鑑共に袁に作る。

② 繼の表文は彼が傳に掲げらる。

景明二年（那蓋、太安十年・五〇一）

七月・柔然犯塞。

景明四年（那蓋、太安十二年・五〇三）

八月・勿吉國使者俛力歸を遣して魏に楮矢を貢す（これより正光迄貢使相繼ぐ）

正始元年（那蓋、太安十三年・五〇四）

九月・柔然十二萬騎、六道より並び進み、直ちに沃野、懷朔にいたり、南恒代を寇せんとすとの報あり、帝、左僕射源懷に詔し之を討たしむ。懷、雲中に至り、柔然亡遁。懷、恒代に至り、築城置戍の處を按視し、五十八條を上表す<sup>①</sup>。帝之に従ひ、北鎮諸戍及東西九城を築く。（源懷傳）  
<sup>①</sup> 今、其五十八條各條は詳ならざるも、彼が邊防の意見の要は其傳に見ゆ。

正始三年（那蓋、太安十五年、他汗可汗伏圖始平元年・五〇六）

那蓋死し、子伏圖<sup>①</sup>嗣立して他汗可汗と<sup>②</sup>號し、始平と改元す。

十月戊申<sup>③</sup>他汗可汗伏圖、使人紇奚勿六跋を遣して魏に朝獻、通和を請ふ。宣武帝、報ぜず<sup>④</sup>。是頃<sup>⑤</sup>高車王阿伏至羅、殘暴、大いに衆心を失ふ。衆共に之を殺し、其宗人跋利延を立て主となす（高車傳）

① 白鳥博士（上掲書）は、伏圖を以て蒙古語 bogda（義）の音譯ならんと推察す。

② 魏言、緒也（傳）。白鳥博士（上掲書）は中東蒙古語に於て絹紐を *utahan* といひツングース語にて *utahan* と云ふが、他汗は即ちこの *utahan* の頭音 *u* の省略せられたるものならんとなす。或は蒙古語にて細き絹紐を *deghu* といひフリヤート語にて馬の手綱を、*dehang dehan* といへば、他汗は寧ろこの *dehan* の對音なるやも知れずとなせり。藤田博士は、緒の義を繼志承業の意にとり、蒙古語にて追隨する、繼續するの義ある語 *dagaku* 官につく業につくなる語 *degaku* の語幹 *dagha*, *degai*, *ni* を附して名詞にする *daghal*, *daghal* (*daghan*, *daghan* に訛) を以て他汗に當てたり。

③ 帝紀この條を九月に據ぐも、此年九月には戊寅なし。通鑑十月に據ぐ。

④ 魏書傳、世祖とせるは世宗（宣武帝）の誤なること論を俟たず。北史傳其他皆、正しく宣武とす。此時、帝は有司に詔し、勿六跋に勅めしめて「蠕蠕遠祖社稷、是大魏叛臣、往者包容、暫時通使、今蠕蠕衰微、有損瞻日、大魏之德、方隆周漢、跨越中原、指清八表、正以江南未平、權寬北掠、通和之爭、未容相許、若脩藩禮、欺誡昭著者、當不孤爾也」と。（傳）

⑤ 傳は三年月を明記せざるも、跋利延立ちて歳餘にして彌俄突入國し、ために國人より殺害されし記事より推し、是が正始三年頃の事件なるを知る。

正始四年（伏圖、始平二年・五〇七）

正月・勿吉、八月、契丹、庫莫奚、十月、曷咄各、魏に遣使朝獻。

十二月・柔然隸下の高車民他莫孤、率部魏に投降。

永平元年（伏圖、始平三年、豆羅伏跋豆伐可汗薨、建昌元年・五〇八）

二月・勿吉、四月・阿伏至羅國（高車）①、六月・高車、

七月・同國及契丹、八月・庫莫奚各遣使、魏に朝貢。

此頃、曷咄、さきに捕虜とし高車の王子彌俄突（曷咄が殺せし窮奇の子）をば納れて、高車王になさんとし、高車を撃つ。高車の衆つひに高車王跋利延を殺し、彌俄突を迎へて王となす（高車傳）②。

九月・柔然可汗伏圖、又勿六跋を遣して魏に函書一封を奉り、且つ貂裘を獻す。宣武納れず、之に諭す事前回と同じ。

この頃、可汗伏圖、高車王彌俄突と蒲類海（バリクルノール）北に戦ひ、これを破る。彌俄突、西走する事三百餘里。伏圖、伊吾の北山に次す。

十二月・高昌王麴嘉、其兄の子孝亮を遣し、魏に奉表して内徙を請ひ、軍を發して迎接せられんことを乞ふ。於是、龍驤將軍孟威を派し、涼州の兵三千人を率ゐて之を迎へしむ。孟威、伊吾に至りしも、期を失して還る。（高昌、孟威傳）

さきに伊吾の北山に次せし柔然可汗伏圖、孟威の軍を見て怖れ遁走す。高車彌俄突、其離駭を聞くや、追撃大いに之を破り、蒲類海（バリクルノール）の北に於て伏圖を殺し、其髪を割きて孟威に送る。又使を遣して魏に龍馬五匹、金銀貂皮及諸方物を獻す。帝東城子于亮に詔して之に報い、樂器一具、樂工八十人、赤紉十匹、雜綵六十匹を賜ふ。彌俄突は其莫何去汾屋引叱賀眞を遣して其方物を貢す。（高車傳）

柔然可汗伏圖の子醜奴③嗣立し、豆羅伏跋豆伐可汗④と號し、建昌と改元す。

那蓋、伏圖兩可汗の世、柔然に服屬し來たれる高昌王麴嘉は、伏圖の敗死を見、畔きて高車に臣事す。

①③ 阿伏至羅と何至羅と同一なることは前註に叙べた所である。彌俄突の子孫なる趙居・去賓等が自國を何

至羅と稱したことより推して、此の阿伏至羅國とは彌俄突が高車中に戻つて建てた更新せし高車國を、特に跋利延の高車國と區別して表現するために用ひた名稱であると思はれる。

③ 通典・醜を配に作る。白鳥博士は、醜奴を以て蒙古語の chinoco (狼の義) の對音ならんかとなせり。

④ 魏言、彰制也(傳)。白鳥博士(上掲書)は蒙古語の制度、法制なる語 *chiri* を以てこの豆羅に當てた。

藤田博士は更に、伏を以て名詞造格の接尾語 *ba* 跋豆は擴大する照らす意ある *badara* 伐は動詞を名詞化する接尾語 *ba* に當て、豆羅伏跋豆伐を以て *badar ba da ba* (法制を以て照らすこと) とせり。

### 永平二年(醜奴、建昌二年・五一〇九)

正月・嚙噠、高昌國、六月・高昌國、七月・契丹國、八月・高昌、勿吉、庫莫奚諸國、魏に遣使朝貢。

### 永平三年(醜奴、建昌三年・五一〇)

二月・(永平元年以來、高昌國十餘度使を魏に遣し珠像白黑貂裘、名物、鹽枕等を獻じ、款誠備至するも帝は優旨を降すのみ、再び内徙を迎へず。)此月、高昌國王麴嘉また遣使朝貢せるを以て武威を再遣し、詔して之を殺す。(高昌傳)

閏六月・契丹國遣使、魏に朝貢。

八月・勿吉國魏に入貢・高車別帥可畀汗等衆一千七百を率ゐて魏に内屬。

十月・高車、庫莫奚國入貢。

### 永平四年(醜奴、建昌四年・五一一一)

七月・契丹、八月・勿吉、魏に入貢。

九月柔然可汗醜奴、沙門洪宣を遣して魏に珠像を奉獻す。此月、嚙噠も亦入貢。

### 延昌元年(醜奴、建昌五年・五一一二)

七月・契丹、八月・勿吉、十月・嚙噠、高昌、庫莫奚諸國魏に入貢。

### 延昌二年(醜奴、建昌六年・五一一三)

三月・高昌、八月・嚙噠、契丹、庫莫奚、九月・勿吉諸國魏に入貢。

### 延昌三年(醜奴、建昌七年・五一一四)

九月・契丹、勿吉、魏に入貢。

十月・宣武帝驍騎將軍馬義舒に詔し、柔然に使用て醜奴を慰諭せしめんとす。(未だ發せざるに帝崩じ(四年正月)事遂に停寢す)此月、庫莫奚國入貢。

### 延昌四年(醜奴、建昌八年・五一一五)

正月・勿吉國、魏に入貢。

二月・柔然、遣使梁に馬貂裘⑥を獻ず。(梁書紀・芮芮傳、南史芮芮傳)

七月・可汗醜奴、使者侯斤尉比建<sup>①</sup>を遣して魏に朝獻す。

九月・高昌、庫莫奚、契丹、十月・勿吉、十二月・高車、各、魏に朝貢す。

延昌中・假員外散騎常侍高徽、嚙噠西城諸國に臣し、破洛候（フエルガナ）烏孫之に因つて高昌を服す（高徽傳）

- ① 梁書傳は烏貂裘となすも、南史の馬貂裘を正しとす。  
② 通志、侯を俟に作る。

熙平元年（醜奴、建昌九年・五一六）

可汗醜奴、壯健にして、よく兵を用ゆ。是歲、西高車を征し、大いに之を破り、其王彌戾突を擒ふ。其兩脚を驚馬上に繋ぎて之を曳殺し、其頭を漆して飲器とす。又高車の衆を并せ、柔然再び強盛となる。高車の餘衆、嚙噠に奔入す。於是、柔然、始めて城郭を築き、木末城と名づく。

（梁書傳）

四月・八月・高昌國遣使魏に入貢。孝明帝、其求援内徙を容さず。優詔<sup>①</sup>を降して之を諭す。（高昌傳）

八月・柔然、梁に遣使朝獻。（梁書紀傳）

- ① 詔、高昌傳に收載せらる。

熙平二年（醜奴、建昌十年・五一七）

正月・勿吉、四月・嚙噠、八月・契丹、各、魏に入貢。

十二月・可汗、使者侯<sup>①</sup>斤尉比建・紇奚勿六跋羣

願禮等を遣し、魏に入朝す。敵國の禮を用ひ、臣敵を修めず。然れども朝議は漢が匈奴に答へし故事に依り、之に報ずることとす<sup>②</sup>（張倫傳）

- ① 侯、通志俟に作る。  
② 此時、大司農少卿張倫は上表して之に報ずべからざる事を論ぜしも従はれず。倫が議は彼が傳に收載せらる。

神龜元年（醜奴、建昌十一年・五一八）

二月・孝明帝、顯陽殿に臨み、柔然の使者願禮等二十人を殿下に引見。中書舍人徐紇<sup>①</sup>を遣し、詔を宣して讓むるに柔然の藩禮不備の意を以てす。この月、嚙噠勿吉亦魏に朝貢。

五月・高車、高昌遣使魏に朝獻す。（さきに高車王彌戾突が柔然可汗醜奴に擒殺せらるゝや、部衆は悉く嚙噠に入れり。然るに數年にして嚙噠は彌戾突の弟伊訶の還國を認し、既にして伊訶は國を復せり。高車傳は其年次を明記せざるも前後の事情より推し、此五月入貢の高車は彼が復興せる高車にして、彼の高車國復興も是歲頃と解すべきならん）

八月・勿吉國魏に入貢。

冬、高昌きた帝に求援内徙を請ひて聽されず。

- ① 徐紇傳を検するに紇が中書舍人たりしことを記する



も此の遣使の記事を缺けり。

神龜二年（醜奴、建昌十二年・五一九）

四月・嚙噠國入貢。

十一月・柔然の莫緣梁賀侯豆、男女七百人を率ゐ

て來降す。（天象志）

神龜中・假平西將軍高徽また嚙噠に出使す。（高徽傳）

正光元年（醜奴、建昌十三年、阿那瓌即位元年・五二〇）

可汗醜奴失行あり①且つ阿至羅（即ち伊匐治下の高車）の侵攻を受け、之を撃つて敗還す。其母侯呂陵氏大臣と共に醜奴を殺し、醜奴の弟阿那瓌②を立つ。

阿那瓌立ちて十日、其族兄侯力發示發③衆數萬を率ゐて阿那瓌を攻む。阿那瓌戰敗れ、弟乙居伐をひきゐ、輕騎羃に奔る。示發、醜奴阿那瓌の母侯呂陵氏及び二弟を殺す。

九月・孝明帝、兼侍中陸希道を使主とし、兼散騎常侍孟威を使副とし、遣して阿那瓌を近畿④に迎勞せしめ、司空公京兆王繼をして北中に至らしめ、侍中崔光・黃門郎元纂をして近郊に於て各、阿那瓌を迎接し、門闕の下に筵引し、禮甚だ厚し。之を燕然館に宿さしめ、宅を歸德里に

賜ふ、中書舍人常景の議に従ひしなり。（孟威傳、洛陽伽藍記）

十月・帝顯陽殿に臨み、瓌を引見賜宴す。瓌兵馬を借りて北に歸り、位を復さんことを請ふ⑤。

十一月・帝、常景の晋威寧中南單于來朝し、之を王公特進の下に置きし例によりて瓌を藩王儀同三司の間に置くべしとの議に従ふ、詔して瓌を朔方郡開國公蠕蠕王⑥食邑一千戸に封じ、錫ふに衣帛を以てし、加ふるに輅車を以てし、祿恤儀衛は之を戚藩に同じくす。

十二月・詔して朝臣に阿那瓌の遣歸許否を議せしむ。頗る異同あり。瓌、私に金百斤を宰相元叉に送り、遂に歸北に決す。詔して懷朔都督をして銳騎二千を以て之を護送し、尙書より行裝を給すべきことを命ず⑦。

是歲・柔然梁に遣使方物を獻す。蓋し示發の遣使せるものなるべし。

是歲・魏、高昌に使者を遣す。

① 醜奴、美女巫地萬の詐術に迷ひ、可賀敦（后）とし、一族間の紛争を惹起せし事、蠕蠕傳に見ゆ。

② 白鳥博士は、蒙古語にて病氣創傷を治療するを *ana-cha* とくれば、この阿那瓌は *ana-cha* 治療者の義

ならんと推せり。

- ③ 通典、候俟力發に作り、別所には略して力發とす。
- ④ 傳は近畿、孟威傳は遠畿に作る。今、傳に従ふ。
- ⑤⑥ 明帝の阿那瓊引見宴賜應對の次第は傳に、又瓊の封侯の詔並びに歸國を賜ふの詔は紀に收載せらる。
- ⑦ 傳は王を主とす。今、紀及通典に従ひて王に作る。

正光二年（阿那瓊、二年、彌偶可社句可汗婆羅門元年・五二一）

正月・阿那瓊等五十四人請辭。帝、西堂に臨みて引見、詔して粟二十萬石其他⑤を賜與し、鎮に到りて之を受けしむ。又、近郡の兵一萬五千を發し、懷朔鎮將楊鈞之を率ゐて、瓊を國に送り回らしむることを命ず。（張普惠傳）

時に柔然に於ては、瓊の南奔後、瓊の從⑥父兄俟力發婆羅門、衆數萬を率ゐて示發を討ち、之を破る。示發逃れて地豆干の地に入り、地豆干の殺す所となり、婆羅門は推立せられて可汗となり、彌偶可社句可汗⑦と號す。

楊鈞この事を聞知し、奏報して、大軍を以てするに非ざれば瓊をして歸國せしめ難きを言ふ。尙書右丞張普惠亦瓊をして歸北せしむるは困難にして而も無益なることを上表し、左將軍尉慶賓

も亦上表固諫す。帝聽かず。（張普惠、尉慶賓傳）

二月・帝嘗て柔然に出使せしことある牒云具仁を遣して婆羅門に、阿那瓊を迎へ國を返すべきことを諭す。婆羅門驕慢、從はず、却つて具仁に禮敬を強要す。具仁節を執りて屈せず。婆羅門、大官莫何去汾俟力⑧丘升頭六人を遣し兵二千を將ゐ、具仁に隨ひて阿那瓊を迎へしむ。

五月・具仁、鎮に還りて其情形を報ず。阿那瓊懼れて敢て進まず。表して洛陽に還らん事を請ふ。會、婆羅門、高車王伊匄のために攻逐せらるゝ所となり、十部落を率ゐて魏に降る。帝、給事中封熙、薛雲尙を遣し、涼州に之を迎へしむ（封敕文傳）於是、柔然の衆數萬、相率ゐて阿那瓊を迎ふ。

六月・高昌、勿吉各、魏に入貢。

七月・阿那瓊啓稱して、精兵一萬を給付せられ磧北に歸りて荒民を撫定せんことを請ふ。詔して尙書門下に傳議せしむ。

八月・帝、兼散騎常侍王遵業を遣し、阿那瓊に宣旨慰勞賜計す。柔然後主俟匿代、懷朔鎮に來奔す。（天象志四）⑨

十月・錄尙書事高陽王雍等、涼州刺史袁翻の對柔然策に基き、上表して、阿那瓊を懷朔鎮の北、吐若奚泉に置き、婆羅門を敦煌の北、西海郡に置き、各、部落を統攝せしめんことを請ふ。詔して之に従ふ<sup>⑧</sup>。

十一月・高昌國魏に入貢。

十二月・安西將軍廷尉<sup>⑨</sup>元洪超に詔し、尙書行臺を兼ねて敦煌に詣りて、婆羅門を安置せしむ。

是歲・高車入貢（北史紀）。朱畫歩預一乘、暢褥鞞一副、織扇各一枚、曲蓋五枚、赤漆扇五枚、鼓角十枚を乞ふ。詔して之を給す。（高車傳）

① 賜賚の品數、傳に詳記せらる。

② 北史傳、從の字無し。今、魏書傳通典に依る。

③ 魏言、安靜也（傳）。藤田博士は之を以て *midial* *isgar-jalik* 如何なる危險にも動搖せざる強固なる精神（意志）の語に當てたり。

④ 北史傳、俟斤に作る。從ふべし。

⑤ 傳、俟賡伐に作り、阿那瓊の兄となす。通志は之を婆羅門となすも誤ならん。傳又此來奔を九月となす。

⑥ 今、紀及天象志に従ひて八月に繋ぐ。  
袁翻の政策は彼が傳に、雍等の奏は蠕蠕傳に收載せらる。

⑦ 通典廷尉卿に作る。

正光三年（阿那瓊、三年、婆羅門二年・五二三）

四月・帝、使者谷楷を遣し、高車國王覆羅伊何を以て鎮西將軍西海郡開國公高車王となす<sup>⑩</sup>。

十二月・阿那瓊、上表して粟を乞ひ、以て田種せんといふ。詔して萬石を給す。

是歲・婆羅門の部衆饑によつて邊邑を侵掠す、河陰令費穆詔を受けて之を宣慰。皆款附す。

① 高車傳、この封侯を、彼の婆羅門攻破以前に繋ぐるは誤。今、帝紀に従ふ。

正光四年（阿那瓊、四年、婆羅門三年・五二三）

二月・阿那瓊の衆大に饑ゆ。瓊、率衆入塞、上表して賑給を請ふ。帝、尙書左丞元孚を以て北道行臺尙書となし、節を持し、往きて賑恤撫諭せしむ。孚、行に臨み上表して柔然をして閑地に田牧せしめ官屬を置きて防察せん策を陳ず。容れられず。

柔然の後主侯匿代京師に來朝。帝西堂に之を引見す<sup>⑪</sup>。

四月・孚、白虎幡を持して阿那瓊を桑玄、懷荒二鎮の間に勞る。瓊衆三十萬と號し、陰に異謀を抱く、遂に孚を拘留し、載するに輜車を以てし日々酪一升肉一段を給し、禮敬すと雖、兵を引

いて南下、路、良口二千、公私驛馬牛羊數十萬を剽掠す。平城に至り、孚を放還す。(元孚傳)

驃騎大將軍尙書令李崇、中軍將軍兼右僕射元纂、

騎十萬を率ゐて瓌を討つ。瓌北遁。崇等、出塞

三千餘里、渡磧して瀚海に至れるも及ばずして還る。(李崇、常景、尉慶賓、爾朱榮傳、天象志)

是頃・婆羅門の部衆また叛して涼州に入寇。費穆

また往きて大に之を破り、其帥郁厥烏余侯斤十代等を斬り、生口雜畜を獲ること甚だ多し。婆

羅門の姉妹三人、嚧噠王の妻たるを以て、婆羅門遂に謀叛して、嚧噠に投ぜんとす。仍て州軍の爲に討擒せられ、洛陽に送らる。(費穆傳)

帝、李崇等が阿那瓌を討ち、追及し得ずして歸りしを以て、常景を遣し、出塞釜山を經、瀚海に臨み、宣敕衆を勅して返らしむ。(常景傳)

九月・庫莫奚國入貢。

① 通志侯陞代を婆羅門とするも恐らく誤ならん。兩者は別人と考へらる。

② 常景傳には宣勅勅衆と見ゆ。勅勅の衆に宣旨せるものとの解は前後の事情よりして妥當に非ざるが如し。

正光五年(阿那瓌、五年、婆羅門四年・五二四)

閏二月・嚧噠、十二月・同國及契丹、地豆干、庫莫奚各入貢。

是歲・婆羅門、洛南の館に死し使持節鎮西將軍秦

州刺史廣牧公を賜る。又瓌の侵寇によりて混亂せる魏の北鎮に反亂起り東西二部敕勒柔然の民之に黨す。柔然馬邑に寇す。(太武五王列傳・元

深傳・周書于謹傳・北齊書叱列平傳)

孝昌元年(阿那瓌、六年・五二五)

春・阿那瓌魏の爲に衆を率ゐ、沃野鎮の叛民破落

汗拔陵を討つ。帝、牒云具仁を遣し、雜物を資して阿那瓌に勞賜す。阿那瓌詔命を拜受し、衆十萬を率ゐ、武川鎮より西し、沃野鎮に向ひ、頻に戰勝す。

四月・帝又兼迎直散騎常侍中書舍人馮雋を遣して阿那瓌に使せしめ、宣勞、班賜差あり。

六月・阿那瓌、拔陵の軍を破り、其將孔雀等を斬る。この頃、阿那瓌、部落既に和し、士馬稍盛なるを以て、乃ち勅連頭兵豆伐可汗と號す。

十月・阿那瓌、使者郁久瑠彌等を遣し朝貢す。

魏の平西將軍高微、嚧噠に使節して還り、抱罕に至りて河州の事を行す。(高微傳)

① 魏言、把擾也(傳)。藤田博士(上掲書)は兵を以て丘の譌とし、tegridur kithelauri(天によりて統制す

ること)なる語の音譯と推論せり。

孝昌二年(阿那瓊、七年・五二六)

三月・西部勅勒斛律洛陽、柔乾の西に反し、河西の牧子と通連す、魏の別將爾朱榮之を擊破す。

孝昌三年(阿那瓊、八年・五二七)

四月・阿那瓊使者輩鳳景等を遣して朝貢し、魏の爲に群賊を討たんことを請ふ。帝詔して、炎暑の故を以て後敕を俟てといふ。その反覆を畏れるの故なり。

六月・九月・阿那瓊また遣使朝貢す。

武泰(建義・永安)元年(阿那瓊、九年・五二八)

正月・北鎮叛民杜洛周、定州を陥れ、刺史楊津を執ふ。これより先、津は長子遁を柔然に遣し、援を請ふ。遁、日夜阿那瓊に泣請、瓊よつて從祖吐豆發を遣し精騎一萬を率ゐて南出せしめ、前鋒既に廣昌に達せしも、賊の隘口を防塞せるを見て、柔然疑を持し、還り、遂に定州陥る。(楊津傳)

是月・柔然、梁に遣使方物を獻す。(梁書紀)

二月・大都督爾朱榮上表し、阿那瓊に乞ふて反賊葛榮の背面を衝かしめん事を建策す。(爾朱榮傳) 四月・孝莊帝阿那瓊に詔し、贊拜名をいはず、上

書臣と稱せざらしむ。

六月・高昌王の世子光を以て平西將軍瓜州刺史となし、襲封して泰臨縣開國伯高昌王とす。

① 詔に曰く夫勃高者貴重、德厚者名隆、端備主阿那瓊領北藩、禦侮朝衰遣使、陰山息警、弱水無塵、刊跡狼山、銘功瀚海、至誠既篤、勳綯莫酬、故宜以殊禮、何容格以常式、自今以後、議拜不言名、上書不稱臣。

永安二年(阿那瓊、十年・五二九)

二月・柔然、梁に遣使方物を獻す。(梁書紀)

永安三年(阿那瓊、十一年・五三〇)

六月・嚙噠國、魏に餉子一を獻す。

柔然士馬強盛、漸稍驕倨。遣使朝貢するに復た臣と稱せず。汝陽王暹の泰州刺史たるや、其典錢齊人淳于軍を遣して阿那瓊に使せしむ。瓊これを留め親寵事に任ず。瓊嘗て洛陽に入り心に中國を慕ひ官號を立て王者に僭擬し、遂に侍中、黃門の屬あり①。軍を以て秘書監黃門郎とし其文翰を掌らしむ。軍、瓊を教唆し輒々不遜に至り、毎に國書を送るに隣敵抗禮を以てす②。

① 通典、黃門郎に作る。

② 此條傳に年次を明記せざるも汝陽王暹の傳によるに暹の泰州刺史たりしは、莊帝還宮より普泰元年迄の間

なるを以て、今は是歲に繋ぐ。

普泰元年（阿那瓊、十二年・五三一）

高昌王麴堅遣使朝貢。平西將軍瓜州刺史秦臨縣伯に除す私署の王號は故の如し。（北史高昌傳）

大昌元年（阿那瓊、十三年・五三二）

四月・孝武帝即位、柔然等諸蕃並びに遣使朝獻す。帝臨軒賜宴。（周書竇熾傳）

六月・阿那瓊、使人烏句蘭樹什伐<sup>①</sup>等を遣して朝貢、並びに長子の爲に公主を尙せんことを請ふ。啞嚙、契丹、庫莫奚も亦各、遣使朝貢。

九月・阿那瓊、高昌、十月阿那瓊遣使朝貢。

① 北史、句を勾、什を升に作る。

永熙二年（阿那瓊、十四年・五三三）

三月・丞相高歡、阿至羅（高車）を招撫し、降るもの十萬戸（正光以來背叛せる高車、茲に至つて復た服す）詔して歡に大行臺を授け、隨機裁決せしむ。歡、常に之に策帛を與ふ。議するもの、徒殺無益となす。歡從はず、撫慰初の如し。其酋帥吐陳等、恩に感じ皆指麾に従ふ。（北史、北齊書紀、通鑑）

四月・武帝詔して阿那瓊の請婚をゆるし、范陽王誨の長女瑯邪公主を以て之に許す。（未だ婚するに至らずして帝關西に出で事停む）

是頃<sup>①</sup>、高車王伊闐、柔然と戦ひ敗れ歸る。其弟

越居、伊闐を殺して自立す。（高車傳）

① 年次不詳なるも、正光三年以降、天平以前の事にか

かる。

天平二年・大統元年（阿那瓊、十六年・五三五）

春、契丹遣使東魏に朝獻す。

是頃・柔然屢、西魏を侵す。西魏之を患ひ黃門侍郎庫狄峙を遣し往きて和親を結ばしむ。峙狀貌魁梧、辭令に善し。瓊之を雅重し、是よりまた西魏を惑せず、和親を請ふ。（周書庫狄峙傳、楊荐傳、通鑑梁紀十三）<sup>①</sup>。

① 通鑑、東魏常山王妹の可汗降嫁を是歲に係げしは誤。

天平三年・大統二年（阿那瓊、十七年・五三六）

正月・西魏の潁州刺史曹泥、涼州刺史劉豐、東魏に降附西魏の軍之を圍む。東魏丞相高歡、阿至羅（高車）に命じ騎三萬を發し、西軍の背を衝かしむ。西軍退き、歡、泥豐を迎へ還る。（北齊書紀、通鑑考異）

二月・高歡、阿至羅に命じて西魏の秦州刺史を攻めしむ

（北齊書紀）

十二月・勿吉國東魏に朝獻。

天平四年・大統三年（阿那瓊、十八年・五三七）

是歲、柔然東魏に遣使朝獻。又、西魏を寇し、河南に渡り、長安大駭。（周書王褒傳）

西魏、柔然と婚を結びて以て之を撫せんと欲し、

文帝乃ち孝武の時の舍人元翬<sup>①</sup>の女を化政公主とし、瓌の兄弟塔寒に妻はす。丞相宇文泰また帝に言ひて皇后乙弗氏を廢して瓌の女を納れんことを請ひ、楊莽、楊寬等を柔然に遣して婚を結ばしむ。(北史皇后列傳、周書楊寬、楊荐傳、通鑑梁紀十四)<sup>②</sup>。

天平年間・高車王越居また柔然の破る所となり、先王伊匐の子比適、越居を殺して自立す。(高車傳)

① 通志、翬を昱に作る。

② 通鑑、此事件を大統四年の條に載す。今、楊寬傳に従ひて大統三年に繋ぐ。

元象元年・大統四年(阿那瓌、十九年・五三八)

二月・西魏文帝、皇后乙弗氏を尼とし、瓌と相識の扶風王孚を可汗庭に遣して瓌の女(悼后)を迎ふ。且つ厚く金帛を贈る。阿那瓌、孚を觀て大いに喜び、於是、東魏と絶ち其使者元整を抑留す。(北史皇后、太武王傳)

三月・柔然、女を西魏に送る。文帝立てゝ皇后となす<sup>③</sup>。柔然、梁に遣使方物を獻す。(梁書紀)五月・柔然東魏を侵し、幽州范陽を掠め、南易水

に至る。

九月・又肆州秀容を掠め、三堆に至り、又東魏の使者元整を殺す。東魏因つて柔然の使者溫豆拔等を囚ふ。

① 皇后列傳には四年正月至京師爲皇后とあるも、今本紀に従ふ。

興和元年・大統五年(阿那瓌、二十年・五三九)

是歲・庫莫奚、西魏に遣使方物を獻す。(周書異域傳)

是頃・(興和初)東魏丞相高歡、柔然の邊害に困み步大汗薩を遣し撫納につとむ。又斛律光等を阿至羅に使せしめ、揚威せしむ。(北齊書斛律羨傳・步大汗傳)

興和二年・大統六年(阿那瓌、二十一年・五四〇)

春、瓌使人龍無駒等を遣して東魏に朝貢す(是より先高歡、瓌を撫せんとし使人龍無駒を北還せしめ、溫豆拔等の音問を通ぜしむ。瓌、既に元整を殺せしを以て溫豆拔等亦存せずと思へるに無駒を見、微く感愧し此貢となりしなり)。

柔然大軍を興して渡河南侵、前驅西魏の夏州に至る。時人、帝が乙弗廢后を復さんとの意あるを可汗憤ての故なりとなす。丞相宇文泰、諸軍を召し沙苑に屯す。廢后自殺、柔然引退<sup>④</sup>。

夏、西魏郁久閭后（瓊の女）薨後、殂す。年十六。六月・柔然東魏に遣使朝獻。勿吉もまた使人石久云を遣して入貢。（勿吉傳）

東魏丞相高歡、相府功曹參軍張微纂を柔然に遣し郁久閭后の死は宇文泰の害せるものなりと説き東魏と通婚せんことを勧めしむ。於是、瓊、東魏と通和、其俟利莫緣渾大力等を遣して東魏に朝貢、其子懿羅辰の爲に婚を請ふ。靜帝、衆散騎常侍太府卿羅念、兼通直散騎常侍中書舍人穆景相等を遣して瓊に使せしむ。（北齊書張微纂傳）八月・阿那瓊、莫何去折豆渾十升等を遣して東魏に朝貢、また婚を求む。詔して常山王臨の妹慕容安公主を以て之に許し、改封して蘭陵郡長公主となす。

十二月・瓊また折豆渾十升を遣して東魏に婚を請ふ。

高車阿至羅の別部、東魏に降を請ふ。高歡、衆を帥ゐて之を迎へ武州塞を出でしも見えず。大獵して還る。

是頃・西魏文帝は僕射趙善を遣して柔然に、さきに郁久閭后（悼后）崩せしを以て、更めて婚を結ばんことを請はしむ。善、夏州に至り柔然が

東魏と通和せるを開き、懼れ還回す。文帝乃ち楊荐をして、往きて黄金十斤雜糒三百疋を賜與せしむ。荐、柔然に至り、其の背惠食言を責め併せて結婚の意を論ず、可汗感悟、乃ち遣使、蓉に隨ふて報命す。（周書楊荐傳）

① 北齊書帝紀は之を夏の事となすも、皇后傳によれば春より夏にかけての事件と解される。又、此後、蠕蠕傳には、攻自ら後后の未だ存するを不順なりと讒言せる如く記するも、皇后傳には當時世上に、専ら帝が乙弗后に猶舊愛を聚ぐる（事實密かに帝は后に害せしめた）を悼后が憤つた爲に興れるものと風評せられたとあつて遽に自ら攻め明白に其憤懣を發言したか否かは疑はしい。

② 張微纂の遊説額末は北史蠕蠕傳を参照すべし。

興和三年・大統七年（阿那瓊、二十一章・五四一）

二月・高車阿至羅出吐拔那渾大、率部東魏に降附。

四月・阿至羅國主比適の柔然に堅壁せられ、その門を先王越去の子去賓、東魏に降降、高歡をして去賓を安北將軍肆州刺史高車王となし、夷虜を招慰せしめ、又穆子琳を其の長史として監視せしむ。既にして去賓、鄴に於て死す。（穆子琳傳、北史高車傳、通典邊防北狄）阿那瓊、吐豆登郁久閭、暨渾侯利莫何折豆渾侯煩等を東魏に遣し馬千匹を奉じて聘禮となし公主を



迎ふ。詔して兼宗正卿元壽、兼太常卿孟詔等をして公主を送らしむ。高歡自ら其資用器物を調へ極めて豐渥。瓌、吐豆登郁久閭匿伏俟利阿夷普、掘蒲提棄之伏等を遣し、新城の南に公主を迎へしむ。

五月・高歡北境を巡り柔然に通使。

六月・高歡、公主の遠嫁を國家の大事なりと重視し、親ら公主を樓煩の北に送り、柔然の使人等を接勞厚賜す。時に魏收、出塞及公主遠嫁の二詩を賦し、大いに時人の傳詠する所たり。(祖凝傳)

阿那瓌大喜、是より東魏に朝貢し、相つぐ。

九月・柔然、梁に遣使、馬一匹金一斤を獻ず。

(南史芮芮傳)

是歲・勿吉東魏に入貢。

① 穆子琳傳に越去とするは誤(越去は天平中に死す)

興和四年・大統八年(阿那瓌、二十三年・五四二)

阿那瓌その孫女<sup>②</sup>を隣和公主とし、高歡の第九子長廣公湛に妻さんことを請ふ。靜帝詔して之を許す。瓌其の吐豆登郁久閭匿掘俟利莫何游大力を遣し、公主を晉陽に送らしむ。

① 北齊武成紀に據れば、太子菴羅辰の女にして成婚は大統十年なりし如し。

武定元年・大統九年(阿那瓌、二十四年・五四三)  
、是歲・柔然東魏に遣使朝獻。

武定二年・大統十年(阿那瓌、二十五年・五四四)

正月・地豆干、四月・室韋使者張焉豆代等東魏に入貢。  
是歲・柔然、勿吉、東魏に遣使朝獻。

武定三年・大統十一年(阿那瓌、二十六年・五四五)

正月・西魏丞相宇文泰、酒泉の胡安<sup>③</sup>隨を遣し始めて突厥に通使す。突厥上下大いに喜ぶ。(北史等突厥傳)

六月・東魏丞相高歡、柔然が西魏と連兵來攻するを思ひ、行臺郎中杜弼をして柔然に使せしめ、世子澄の爲に婚を求む。阿那瓌曰く、高歡自ら娶らば則ち可なりと。歡、猶豫決せず。澄、婁妃、尉景と共に勸請、乃ち之に従ひ、鎮南將軍慕容儼を遣し往きて聘す。號して蠕蠕公主といふ。瓌、其弟突佳をして公主を送らしむ<sup>④</sup>。

八月・高歡親く蠕蠕公主を下館に迎ふ。公主至り妃婁氏自ら正室を避けて之を置く。(公主性嚴毅一生華言を肯ぜず)。(北史蠕蠕公主傳、通鑑)(これより東魏の邊塞無事、武定末まで貢使相尋ぐ)十月・高歡、柔然防禦の爲、幽安定三州に城戍を脩立、躬ら臨地督責、嚴固ならざるなし。

① 北史蠕蠕傳は此結婚を武定四年とし、且つ阿那瓌の發意の如く記し、且つ其女を晉陽に送れるは、吐豆登郁久閭汗拔姻姫等となすも、今、皇后列傳、通鑑等に據る。

武定四年・大統十二年（阿那瓌、二十七年・五四六）

是歲・柔然、西魏原州州城に逼り居民を剽掠す。

刺史李賢、騎士を率ゐて之を撃ち、二百餘級を斬り百餘人を虜し、駝馬牛羊二萬頭を獲。（周書李賢傳）

是歲・柔然及び室韋、勿吉、地豆干並に東魏に遣使朝獻。

是歲・突厥酋長土門、西魏に遣使、方物を獻ず。（北史突厥傳）

武定五年・大統十三年（阿那瓌、二十八年・五四七）

正月・柔然西魏の高平に寇し、方城に至る。（周書紀）

是歲・勿吉國東魏に遣使朝獻。西魏、高昌國世子玄嘉を王となす。（北史高昌傳）

武定六年・大統十四年（阿那瓌、二十九年・五四八）

是歲・柔然、室韋、遣使東魏に朝獻。

武定七年・大統十五年（阿那瓌、三十年・五四九）

是歲・柔然、地豆干、室韋、遣使東魏に朝獻す。

武定八年・（齊天保元年）・大統十六年（阿那瓌、三十一年・五五〇）

正月・地豆干、契丹、東魏に朝獻。

四月・柔然、使を遣し東魏に朝獻す。

七月・西魏、齊を討つ。柔然の虚に乗ぜんを畏れ

楊莽を遣し和好を堅む。（周書楊莽傳）

十月・柔然、使を遣し齊に朝獻す。

十二月・柔然、庫莫奚齊に朝獻。

天保二年・大統十七年（阿那瓌、三十二年・五五一）

二月・七月・柔然、齊に遣使朝獻。

四月・室韋國齊に遣使朝獻。

是頃・鐵勒、柔然を伐たんとす。突厥酋長土門所部を率ゐて邀撃し之を破り、盡く鐵勒五萬餘落①を降す。遂に強盛を恃み、婚を柔然に求む。

阿那瓌大怒使者を遣し、詈辱して曰く、爾は是れ我鍛奴、何ぞ敢て是言を發するや、と。土門亦怒り其使者を殺し、遂に柔然と絶ち、而して婚を西魏に求む。西魏丞相宇文泰、之を許す。

六月・西魏、長樂公主を土門に妻す（北史周隋書突厥傳）

① 北史突厥傳の傳首別條及隋書には五萬餘家と記す。

天保三年・廢帝元年（阿那瓊、三十三年、鐵伐即位元年・五五二）

正月・齊帝、庫莫奚を代郡に親討、大に之を破り、雜畜十萬餘を獲、將士に分賜すること各、差あり。奚口は山東に付して民となす。

是月・突厥酋長土門、柔然を撃つ（周書北史突厥傳）

二月・柔然可汗阿那瓊、懷荒<sup>②</sup>の北に於て、土門に破られ自殺す。其子菴羅辰、從弟登注俟利發、注の子庫提、衆を擁して齊に奔る。

柔然の餘衆、注の次子鐵伐を立て主となす。（北

史北齊書紀、蠕蠕傳）

是月・契丹、四月・室韋各、遣使、齊に朝貢す。

是頃・阿那瓊の子孫を奉ぜる柔然の衆<sup>③</sup>、西魏を侵す。西魏の將史寧兵を率ゐて邀撃、瓊の子孫並に種落を獲。是より戰ふ毎に之を破り、前後數萬人を獲たり。（周書史寧傳）

齊將斛律金、白道より出撃、柔然別帥豆蔆吐久備等三千餘戸を虜にし、又齊文宣帝と共に柔然主但鉢<sup>④</sup>を吐賴に討ち二萬餘戸を獲（北齊書斛律金傳）

① 北史、荒を茫に作る。今、周書通典に従ふ。

② 恐らくは鐵伐の衆歟。  
但鉢亦鐵伐と同人ならんか。

天保四年・廢帝二年（鐵伐二年・五五三）

正月・庫莫奚、齊に朝獻。

二月・齊文宣帝、登注<sup>①</sup>及庫提等を北に還らしむ。時に鐵伐、契丹の爲に殺され、國人登注を立てて主となす。登注また大人阿富提等の殺す所となり、國人また庫提を立て主となす。

是頃<sup>②</sup>柔然の別部、阿那瓊の叔父鄧叔子を立て主となせるが、突厥乙息記可汗（時に土門既に死し、其子科羅立ち乙息記可汗と號す）の爲に沃野の北木賴山<sup>③</sup>に於て擊破せらる。（北史周書隋書突厥傳、通典蠕蠕傳）

三月・突厥乙息記可汗科羅、西魏に遣使、馬五萬匹を獻ず。（周書突厥傳）

九月・契丹、齊邊を寇す。文宣帝伐ちて大いに之を破る。（事、北齊書帝紀三國典略等に詳なり）

十二月<sup>④</sup>・柔然庫提、また突厥の破る所となり、舉國齊に奔る。文宣帝、突厥を討ち、柔然を馬邑川の地に迎納し、庫提を廢して菴羅辰を以て主となし、食糧衣帛の類を給す。是より柔然また齊に貢獻相つぐ。

帝、更に突厥を朔州に追ひ、突厥、降を請ふ。之を許して還る。

① 北齊書帝紀、鐵伐も亦北還せる如く記するは否なり。伐は元來齊に來奔せず、北史帝紀、蠕蠕傳正記す。

② 周書突厥傳に據れば、廢帝元年正月以後、同二年三月迄の間に鄧叔子は即位し、且つ乙息記可汗に擊破せられたることを知る。尙、鐵伐と鄧叔子との關係は、通鑑考異卷七の「魏書北史蠕蠕傳皆云立鐵伐爲可汗、突厥傳皆云立鄧叔子爲可汗、蓋部落分散、各有所立也」なる見解を是とすべし。

③ 北史、木の字無し。

④ 北齊書帝紀の條を十二月に係げ、通鑑は十一月に係ぐ。柔然奔齊、齊帝北討突厥の日なる已未、癸亥の干支は此天保四年十一月（梁魏閏十月）にも、十二月にも共存するも、今、帝紀に従ひ十二月となすを可とすべし。

⑤ 北齊書帝紀、川を州に作る。今、假に北史紀・傳、通典蠕蠕傳に従ふ。

天保五年・廢帝三年恭帝元年（五五四）

三月・柔然の主菴羅辰、齊に叛す。齊帝親討、大いに之を破る。辰父子北遁。

四月・柔然、齊の肆州を寇す。齊文宣帝之を討ち

恒州に至る。柔然散走す。帝二千騎を以て殿をなし、黃瓜堆に宿す。大軍すでに還れるに、柔然の別部數萬騎奄至、扣鞍して進み四面圍逼す。帝安臥、平明乃ち起き神色自若、從兵奮擊。柔然退走、之を追ひ伏尸二十餘里、菴羅辰の妻子を獲、三萬餘口を虜にす。都督高阿那肱に令し、其走路を塞がしむ。菴羅辰、嚴谷を越え身を以て免る。（三國典略〔御覽所引〕）

柔然乙旃達官①西魏の廣武に寇す。

五月・廣武郡公資熾、柱國趙貴と分路之を討つ②。達官聞きて引退。熾、河を渡り麴伏川に至つて追及、大いに之を破り、其酋帥郁久閭是發を斬り、生口數千、雜畜數萬頭を獲たり。（周書帝紀、資熾、趙貴、王勇傳）

齊帝また柔然を討ち大いに之を破る。

地豆干、契丹、齊に遣使朝獻。

六月・柔然、部衆を率ゐて東徃南寇せんとす。齊帝輕騎を率ゐて之を金山下③に邀擊す。柔然聞きて引退。齊の營州刺史王峻、伏を設けて之を擊ち其名王郁久閭豆拔提等數十人を獲。菴羅辰

是に於て遠遁す。(北齊書王峻傳)

① 恐らく別部帥ならん。

② 通鑑、趙貴を李弼に作る。疑ふ可し。

③ 蠕蠕傳は金川下に作る。今、文宣紀に従ふ。尙通鑑は金川とし、胡三省は唐志に見ゆる單于府金河縣の事歟となすも疑し。

天保六年・恭帝二年(五五五)

五月・柔然、齊に遣使朝獻す。

六月・齊文宣帝また柔然を討つ。諸軍祁連池に大會し塞を出で庫狄谷に至る。百餘里内、水泉無く全軍渴乏す。俄して大雨あり。

七月・文宣白道に頓し輜重を留め輕騎五千を率ゐて柔然を懷朔鎮に追及、帝射矢石を犯し、頻に之を破り、遂に沃野鎮に至る。其俟利謁焉力婁阿帝吐頭發郁久閭狀延等并に口二萬餘、牛羊數十萬頭を獲、又俟利郁久閭李家堤、部人數百を率ゐて降る。帝、晋陽に還る。

是時、突厥木杆可汗頻に柔然主鄧叔子を撃つて之を破り、遂に柔然を滅す。

鄧叔子餘類千餘家を率ゐて西魏に奔る。西魏、李弼を遣し、之を迎納す。突厥既に兵強を恃み

且つ柔然が大國に依憑するを忌み、悉く之を殺さんことを請ひ使驛相繼ぐ。西魏太師宇文泰、議して之を許し、遂に鄧叔子以下三千餘人①を收縛し、突厥の使者に附し、長安城青門(霸城門、門色青、民之を青城門、青門と稱す)外に於て之を斬る。中男②以下は死を免じ王公の家に配して奴隸となす。(北史蠕蠕、北史、周書、隋書各突厥傳李弼傳、通典卷百九十六)

① 月日不詳なるも是歲即恭帝二年中なることは、北史蠕蠕突厥傳通典等の記載にて明なり。

② 北史突厥傳は千人となすも、今、同蠕蠕傳及通典が三千餘人となし、周書突厥傳亦三千人となすに従ふ。

(通鑑通志三千餘人とす)

③ 西魏の制は不詳なるも、北齊は男子十六歲以上十七以下を、北周は十一以上十七以下を中男となす。(河清令・保定令(隋書食貨志引))

(案)